

研究だより



香川大学教育学部 附属坂出小学校

ごあいさつ

校長 まつむら まさふみ
松村 雅文
副校長 みやの しんや
宮野 真也

陽春の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本校では平成26年1月30日、31日の両日にわたり、第97回教育研究発表会を開催いたしました。県内外から延べ約1,800名の参会者をお迎えし、盛会裏に終了することができました。

参会者の「続けて参加している」「子どもの姿に研究成果が見える」等のことばに、11年目となる「思考力」研究、3年目となるユニバーサルデザインの授業づくりについて、確かな手応えを感じました。ご指摘いただいた課題の解決に向け、県内外の教育に資するべく研究を続けてまいります。

懇切なるご指導ご助言をいただきました文部科学省、香川県教育委員会、各市町教育委員会、香川大学教育学部の先生方、また、運営にご協力くださいました保護者、ボランティア学生及び関係各位に対して、心より御礼申し上げます。



< 目 次 >

◇ごあいさつ	1	・外国語活動の取り組み	10
◇第97回教育研究発表会を終えて		・分科会講演	11～12
・研究発表会の概略	1	・全体授業・シンポジウム	13
・各教科の研究授業報告	2～9	◇次年度研究に向けて	14
・鼎談	9	◇あとがき	14

第97回教育研究発表会を終えて

研究発表会の概略

「思考力」を育成するユニバーサルデザインの授業づくり(2年次) — 特別支援教育の考えを生かして、すべての子どもの思考活動を保障する —

「思考力の育成」は、変化の激しい現代社会を生き抜くために求められている課題です。しかし、これは近年始まったものではありません。本校でも昭和30年代に思考力を研究のテーマに掲げていました。この古くて新しい課題に立ち向かうために、3年前より私たちが試みているのが、「特別支援教育の考えを生かす」ことでした。

本年度の授業づくりでは、思考に必要な「学習意欲」と「知識・技能」に対して特別支援教育の考えを生かした働きかけを複数行い、子どもたちの思考活動を保障しようと試みました。また、「学びは子どものものである」という原点に戻り、子どもたちどうしの学び合いを重視した授業提案を行いました。

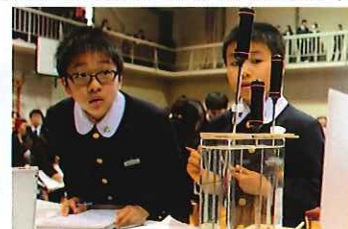
1日目の鼎談では、文部科学省、大学、本校の三つの立場からユニバーサルデザインの授業づくりについて語り合いました。さらに2日目のシンポジウムでは、文部科学省の先生方と共に、具体的な授業における思考力育成のポイントを、全体授業を基に明らかにしていきました。

「これは、流行であり不易の授業づくりだ」

参会されたある先生のご感想です。私たちもこの研究を通し、本当に大切なことは、時代を超えて根本でつながっているとの思いを強くしたところです。

「分からないから考える」「知りたいから学び合う」という学びの根源を支える思い、真実を追究していきたいという思いは、子どもたちも、私たちも同じです。

本校の「思考力」育成への挑戦は、まだまだ続いていきそうです。



【全体授業(第4学年理科)】

国語科

第2学年 「知ったことをもとに考えたことをまとめよう - 『虫は道具をもっている』 -」

しのはら ともこ
篠原 智子

『虫は道具をもっている』を読み、虫が体に持つ道具についての考えをまとめてきた子どもたち。本時は、体に道具を持つ「バッタ」「アシナガバチ」「タカ」が紹介された文章を読み、その中からお気に入りの体を借りて、やってみたいことを考えていきました。まず、生き物と人間の欄を左右に配置し両者を比較しやすくした表を活用して、それぞれの道具の類似点を見つけていきました。本文は生き物ごとに分けたものを提示し、どの子も混乱することなく読んでいけるよう



【表を活用して類似点を捉える】にしました。「バッタの足」と「トランポリン」を比較して「高く跳ぶ」という類似点を見つけ出した子どもたちは、次に、トランポリンで高く跳んだ経験を語り合いました。その中で、「バッタの足」の働きのすばらしさを実感を伴いながら捉えていきました。さらに、両者の違いを「虫は道具をもっている」「人間は道具を使う」という



言葉で確認していくと、道具と同じ働きをする生き物の体に対する憧れの気持ちは一層高まりました。その思いを「わたしはバッタの足を借りて、〇〇をやってみたいです。」と文章にまとめていきました。その後、書いた文章をペアで紹介し合う交流活動を行いました。ここでは、友達から出された質問に答えることを通して、やってみた

【質問に答えて考えを深める】

いことを、より具体的に考えていく子どもたちの姿が見られました。

リフレクションでは

「表を活用したり本文が分かれて提示されたりしたことで、生き物と人間の比較がしやすく、どの子も考えがもてていた」というご意見の一方、「交流の時間をもう少し長く取ればよかった」というご意見もいただきました。文部科学省・丹野哲也先生からは、「通常学級においては『どの子にも分かる授業』が求められており、そのためには個々の認知特性に応じた手だてが必要」とのご指導をいただきました。

国語科

第4学年 「調べて伝えたいことを、資料を使いながら書こう」

にしおか よしくに
西岡 由都

鉄道、スポーツ等、興味のあるテーマを選んで調べ、3年生に伝える文章を作成途中の子どもたち。文章と共に、写真やグラフ等の資料を使って、分かりやすく伝えようとしています。本時は、教科書を通して、どのように資料を選べば、より分かりやすく伝えられるのかを考えました。教科書には、手軽な朝食についての文章と、それに関する三つの資料が掲載されています。適切に資料を選択する際には、その資料の特徴を十分



【情報を精選】

に把握しておく必要がありますが、そこにはさまざまな情報が混在しているため、とまどう子どもがいることが予想されました。そこで、資料の情報を精選できる教材を準備しました。子どもたちは、色分けされたシートで覆いをしたり、三つの資料を二つずつ比べたりして、「これは、オレンジ牛乳のよさを中心に書いている文章だから、その作り方の資料を選べばいいよ。」と、文章との関わりを考えながら、資料



【読み手について話し合う】

選択ができました。その一方で、「3年生のことを考えて、この資料を選びました。」という友達の発言から、文章との関わりだけではなく、読み手に応じた資料選択の必要性についても話し合い、考えを深めていくことができました。その後、学び合ったことを生かして、自分のテーマの文章の続きを作成していきました。中には、前時までには作成していたところの資料を変更しようとする子どももいました。

リフレクションでは

『3年生に伝える』という相手意識が、単元を通して、また本時に強く表れていた「教科書で学んだことのまとめをしておく必要があった」等のご意見をいただきました。文部科学省・水戸部修治先生からは、1単位時間に、教科書の文章と自分のテーマの文章の両方を扱う展開は効果的だったが、単元の終盤では、学んだことを習得・活用する後者の活動の割合を、より多くしていくことをご指導いただきました。

国語科

第5学年 「伝えたい 先達のことば — 『手塚治虫』 —

なかた ゆうじ
中田 祐二

「希望を信じる人」「アンパンマンのような人」…。昨年10月に亡くなった漫画家、やなせたかしさんについて子どもたちが抱いた思いです。本時は、そんな自分の思いを伝えるためにふさわしい叙述を、五つの新聞記事から見つけ出していきました。

たくさんの文章を読むことに抵抗のある子どもは、まずICレコーダーに録音された文章を聞きながら記事を読み始めました。難しいことばがあっても立ち止まらずに読み進めることで、文章の大体を捉えることができました。



さらに子どもたちは、これまでの学習で見つけてきた「文章の大体を読むコツ」【カードを叙述の横に並べて】を活用していきました。この授業でも、ある子どもが「調べたいことと関係のあることばの周りを読めばいい」という新たなコツを発見しました。そして、見つけ出した叙述が本当に自分の伝えたい思いにふさわしいかどうかを確かめるために、「やなせさんは〇〇な人だ」と自分の思いを書き込んだカードを記事の叙述の横に並べ、両者のつながりを吟味していきました。



【子どもの発言を板書で構造化】

その後、見つけ出した叙述を発表する中で、やなせさんの生き方を表す象徴的な表現に目が向きました。「正義は逆転する」と言ったやなせさんの正義観と自分の考える正義はどう違うのか。そのことについて友達はどう考えているのか。優れた叙述に対する自分の考えが形成されていきました。

リフレクションでは 『「コツ」や『カード』により、たくさんの文章の中から必要な叙述を見つけて出すことができていた」「構造的な板書が学び合いを促していた」「子どもたちで学習問題をつくり上げたのがよい」等のご意見をいただきました。文部科学省・水戸部修治先生からは「ICレコーダーの音声は線条性をもつ。本時のように、自分にとって必要な部分を選ぶ際の読み方との違いに留意するとよい」とのご指導をいただきました。

社会科

第3学年 「秋祭りへの願いとともに 地域で受けつぐ 獅子舞の技」

ふじもと ひろふみ
藤本 博文

約40年前、獅子舞を担う若者が集まらなくなり、獅子舞を中断した地域があることを、子どもたちは前時に学習しました。その原因は、県外への進学率の増加、市外の企業へ就業する者の増加、そして伝統を守ることへの考え方の変化によるものです。それにもかかわらず、その15年後に復活させたことに疑問をもち、その理由を探りました。その際、子どもたちは、獅子舞の道具が更新されていく順序を手元のボードで並べたり、獅子舞の頭や油単という胴の部分になる布を、間近で見たり触ったりして、道具が更新されてきたことを実感しました。



【手元で年代順に並び替え】

そして子どもたちは、坂出市の出来事や人々の気持ちの変化等を手がかりにして予想を書きました。その後の話し合いから「電話の普及や高速道路の開通に伴って、人々が集まったからだろう」「お祭りで獅子舞がないのは悲しいから、若者を集めたのだろう」と、子どもどうして予想をつないで、考えを深めていきました。その検証として、「瀬戸大橋の開通を一つの目標にして人を集めました。また、獅子舞をしてお礼を言われると勇気づけられます。こんな地域のつながりを大切にしたいと思っています。」と、ゲストティーチャーから話をいただき、子どもたちは、地域の人たちが獅子舞を復活させた熱い思いを確認しました。



【諸感覚を使って時代の経過を実感】

リフレクションでは 「実物を使ったりゲストティーチャーを招いたりすることで、子どもたちが具体的なことばで考えることができた」「人々の思いに目を向ける資料がある方がよい」というご意見をいただきました。文部科学省・澤井陽介先生からは、地図を使うことの有効性をご指導いただいたり、思いに目を向けるために、学習問題に「どんな思いで復活させたのか」等と、具体的に表してはどうかという代案をいただいたりしました。

社会科

第5学年 「海と共に生きる ー被災地から学んだことー」

わたなべ たくし
渡部 岳史

前時までに子どもたちは、日本の国土は自然の恩恵とともに自然災害も多いことを学習し、三陸海岸の津波被害やそれを克服しようとした人々の営みを調べることで、「津波から命を守るためには巨大防潮堤が必要だ」という意識になっていました。本時は、巨大防潮堤建設に反対している気仙沼市の人々を取り上げ、「なぜ反対しているのか」という学習問題を追究しました。しかし、普段防潮堤を見たことが少なく、



【防潮堤立体模型の提示】イメージを膨らませにくい子どもがいることが想定されました。そこで、防潮堤の立体模型とそれが建設される東北地方の海岸線を強調した地図を示しました。それを見た子どもたちは、「海が見えなくなる。」「生き物が少なくなる。」という防潮堤建設の影響を導きだしました。また、その影響を防潮堤の仕組み図にまとめて提示することで、子どもたちはそれらを気仙沼に住む人々の生活と関係づけ、反対する理由を予想していきました。予想を



【整理シートの活用】

吟味する中で、「防潮堤ができれば漁業や観光業で働く人が困る。」「気仙沼で生活ができなくなる。」と考えを集約していきました。そして、それを検証するために、牡蠣養殖業を営む「畠山さん」の震災後の年表を用いました。震災後すぐに、同じ場所で牡蠣養殖を復活させようとした理由を時間・公的視野を広げ、整理シートに位置づけながら話し合うことで、畠山さんや気仙沼の人々が防潮堤建設に反対し、自然保護にこだわったのは、ふるさとを愛する心からであることを確かめていきました。

リフレクションでは

自然災害を負の側面だけでなく、自然から受ける恩恵という正の側面の両面から捉えさせる取り組みに対して賛同をいただきました。また、「巨大防潮堤の立体模型を縮尺が分かるように人形を並べて提示したことで、圧迫感や見える景色の変化を感じ取ることができた」というご意見の一方で、「働きかけは、子どもがそれを求めている状況ですべきではないか」というご意見もいただきました。

算数科

第2学年 「はこの形をよく見よう ーはこの形ー」

しらかわ あきひろ
白川 章弘

本実践では、箱の形の構成要素（面、頂点、辺）に着目し、比較しながら観察、構成することにより、箱の形の性質を捉える力の育成を目指しました。

前時までに、「面の数は同じで面の形に違いがあること」「箱の形にも頂点や辺があること」を共通理解した子どもたちは、本時、箱の形の頂点や辺について詳しく調べていきました。しかし、立体図形における辺や頂点についての認



【モールとストローで箱の形を構成】識が不十分なために、辺や頂点を見つけられなかったり、重複して数えたりする子どもや、箱の形を構成することに夢中になり、性質にまで目が向かなかつたりする子どもがいました。そこで、個々に作った箱の形に頂点（モール）や辺（ストロー）をあてがいながら構成させたり、頂点や辺に番号を書き込めるようにしたりすることで、辺や頂点の位置や数を確かめられるようにしました。また、目的意識をもって観察、構成することができるように、見つけたことを表にまとめさせ、構成要素ごとに比較ができるようにしました。



【大きな箱を観察】

このような働きかけにより、箱の形から辺や頂点を見つけ、それらの数を正しく数えることができ、「箱の形には、辺が12本、頂点が8つある」「辺の長さには違いがある」等、構成要素に着目して箱の形の性質を捉えていきました。また、グループで大きな箱の形について観察する活動を設定しました。その際、表にある観点到絞って比較しながら異同について話し合わせたことで、箱の形の性質をより深く捉えることができました。

リフレクションでは

「作った箱にストローやモールをあてがいながら構成させることで、辺や頂点の位置が明確になった」「表に整理させることで、3種類の箱の形の性質を比較しながら捉えることができた」等のご意見をいただきました。一方で、「辺や頂点の数だけでなく、それらの位置についての理解を深めるような支援が必要」「『思考力』育成のためには、『比べたい』という意欲を高めることも大切」等のご意見もいただきました。

算数科

第6学年 「全体を1と見ると部分が見える -割合を使って-

しみず あきひと
清水 顕人

道のり（全体）が明らかではない場面において走った時間（部分）を求める問題に対し、道のり（全体）を何らかの数値によって仮定することで、部分との関係を捉える思考が進んでいくと考えました。そのため、線分図を用いて具体的な場面の様子を捉えることが有効です。そこで、問題文に合わせて絵を提示したりテープをのばしたりしました。また、走った場合と歩いた場合で色を変えて示すことで、線分図のどこが何の数量を表しているのかが見えやすいようにしました。その際、「道のり＝速さ×時間」等のことばの式



【絵やテープで線分図と場面をつなぐ】



【共通の線分図を用いて学び合う】

を手元で確認できるようにカードを配布しておきました。それにより、子どもたちは線分図と具体的な場面の様子をつないでいきました。

その後、数量の分からない全体の道のりを、400mや1600m等の数値によって仮定したり、1という割合で表したりする考えが、どの子のワークシートにも表出されました。さらに、拡大したワークシートを黒板上に示し、それを基に発表することで、個々の考えを黒板上の考えと比較し、全体を何らかの数値で表せば、求めたい部分に分かることを捉えていきました。

リフレクションでは

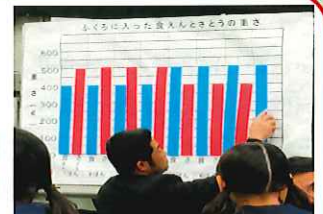
「絵図やテープによって場面の様子や線分図をつなぐことで、線分図のどこが何を表すかという知識をそろえることができた」と、働きかけの有効性が確認されました。一方、「課題設定までの時間を短縮して、学び合いの時間をもっと確保すべき」等の改善点も明らかになりました。文部科学省・丹野哲也先生からは、子どもの日々の生活と結びつけた学習を展開していくことが大切であるというご指導をいただきました。

理科

第3学年 「変えると変わる？ -物の重さをくらべよう-

さいき ともや
済城 智哉

本実践では、「体積が同じでも物によって重さが変わることを捉える力」の育成を目指しました。本時は、子どもたちは食塩と砂糖の重さの違いを調べていきました。ただ見た目の大きさで重さの違いを結論づけてしまい、その違いを明らかにしようとしなかったことが想定されました。そこで、体積と重さが違う食塩と砂糖を袋に入れて提示し、二つの重さを、電子てんびんで測定させました。そして、その結果を配列して示したグラフを見ることで、食塩と砂糖のどちらが重いのかはこの結果から



【測定結果の配列】

では分からないことに気付いていきました。このことから、「同じ容器に入れて体積をそろえないといけない。」という考えが生まれ、学習問題を設定していきました。その後、同体積にした二つの物を測定しました。その際、計測する操作だけに夢中になり、学習の目的を忘れてしまう子どもがいました。そこで、二つの物を比べる意識



【結果を記録用紙に記入】

を常にもてるように天秤のイラスト入りの記録用紙を使わせました。そうすることで、学習の目的を明確にして活動に取り組む姿を見ることができました。そして、「3種類あるどの容器に変えても食塩の方が重くなる」というグループの実験結果を基に交流することで、「どのグループも、3種類あるどの容器で比べても、やっぱり食塩の方が重い。」と物の性質を捉えていくことができました。さらに、他の物の重さの違いを調べてみたいと問題意識をつなげていきました。

リフレクションでは

「学習問題が子どもたちのことばによってつくられていた」「何を比べるか、はじめの実験をすることで焦点化が図られていた」「記録用紙のイラストが比べることの意識を持続させていた」等のご意見をいただきました。一方で、「話し合いの時間を確保するためにも、一人一人の活動内容を精選することが大切」「3種類の容器を使う必要性がもてるような支援の工夫が必要」等のご意見もいただきました。

生活科

第1学年 「きたかぜとともだち 一かぜをつかって あそぼうー」

なかや けいご
中家 啓吾

風車や吹き流しといった風を使ったおもちゃを作って、楽しく遊んだ子どもたち。本時では、吹き流しを使った遊びを「もっとおもしろい遊びにしよう」と新聞紙や布等の材料に目をつけて工夫したり、遊び方を考えたりしていきました。

子どもたちはいろいろな材料でできた風車で遊んだ経験から、「材料を変えると遊びがおもしろくなりそうだ」と、思いつきました。しかし、材料が風に吹かれた時にどのように動くかということは、具体的にイメージすることができませんでした。そこで、風に吹かれた時の各材料の動きを映像で示し、それぞれの写真を黒板に並べて、



【材料の動きを黒板に配列】各動きに子どものことばで説明をつけていきました。映像や板書を基に「ちょうちょうみたいな動きにしたい」「よく動くようにしたい」と、「おもしろい」を具体にして、材料を選択していきました。



すぐに決まらなかった子どもも、実際に材料を触って硬さを確かめることで、使う材料を決め、吹き流しを作りました。遊びの際、一度試すことで材料を変更したり、送風機の角度を変えることで風の向きを変え、遊び方を工夫したりする子どもの姿が見られました。その後、工夫紹介カードの括弧に材料を選んだ理由等を書くことで紹介文を完成させ、「布を選ぶと、思った通り、こいのぼりのような動きをしておもしろ

【材料に触れて性質を確認】かったです。」等と、作った吹き流しとそのおもしろさについて紹介し合いました。

リフレクションでは

「映像や写真の活用がイメージをつくるのに有効であった」「どの材料を使うかが決められない子のため手だてが複数あり、材料の違いによるなびき方の違いに全員の子が気付いていた」等、働きかけが有効であったというご意見をいただきました。一方、「導入を短くし、もっと子どもたちの活動の時間を確保したい」「吹き流しで遊ぶ様子を全員の前で実演させればよかった」等のご意見もいただきました。

音楽科

第5学年 「『ゴジラ物語』の音楽をつくろう」

おおた まさこ
太田 雅子

子どもたちは『ゴジラ』の旋律を基に、グループごとに考えた「ゴジラ物語」にふさわしい音楽を完成させようとしています。物語の様子を表すには、強弱、速度、高低、拍子、かけ合いといった音楽を特徴付けている要素や仕組み（本単元では「技」とする）を効果的に用いる必要があります。本時はまず『ぶんぶんぶん』に「技」を当てはめ、「技」を使った時と使わない時の楽曲の感じ方を比較することで、「技」



【「技」の効果を板書で整理】の効果を取り戻しました。それを板書に整理することで、「技」の効果を一目で捉えやすくしました。その後、『ちょうちょう』にも同じ技を当てはめて聴き比べ、楽曲が異なっても技の効果は同じであることから、『ゴジラ』にも同様に用いていけそうだという見通しをもちました。そのことを踏まえ、作品の中でたくさん使っている「技」



のうち、「踊っている感じを出したいから、3/4拍子は絶対に必要」等、表したい音楽にするために特に主張したい「技」をグループごとに選びました。つくった作品の聴き合いでは、発表グループは物語のあらすじと「技」を伝えてから演奏しました。鑑賞グループは、「技」により物語がよく伝わったら青カード、伝わらなければ赤カードを示し、アドバイスを送り合いました。もらったアドバイスは、表したい物語の様子や技を使った意図と照らし合わせ、音で確

【「技」がふさわしいかどうか聴き合う】認してから修正する時の判断材料にしていきました。

リフレクションでは

既習曲から聴き取った「技」を「匠の技ファイル」にまとめてきたこれまでの学習が定着しており、技の効果をよく理解して音楽づくりに用いることができていたというご意見をいただきました。一方、学び合いについては、友達の見解を必要とするような必然性のある場を設定することで、友達のアドバイスを取り入れ、さらに作品をよくしていこうと意欲的に取り組めるとのご示唆をいただきました。

図画工作科

第4学年 「つくろう ゆめの家」

こいで やすひろ
小出 泰弘

紙粘土でつくったパーツで、表したい夢の家をつくってきた子どもたち。本時は、自分たちが持ってきた材料で飾り付けをしました。前時の振り返りをする中で、紙粘土の際と同様に、材料の使い方を工夫して表したいイメージに近づけたいという意識が高まりました。しかし、用意した材料から受ける感じが曖昧なまま、飾り付けを進める子どもがいることが想定されました。そこで、まず紙粘土のパーツで表す際にも大切にしたい、形、色、手ざわりという三つの観点から、材料を見直すことにしました。その際、材料の形や色に焦点化したイラストを見比べたり、材料を触ったりしな



【材料の感じを板書上で整理】

がら感じたことを表出させ、それらをカードに書いて板書上で整理しました。次に、材料ボックスの中で、似た



【材料の感じを付箋で表す】

ものが集まるように材料を配置し、それぞれがどのような感じがするか、三つの観点を基に、付箋に書く場を設定しました。それにより、自分の表したい家をつくる際、「妖精が住みそうなイメージだから、明るい色のふわふわした手芸玉を使おう。」等、よりイメージに合う材料を選ぼうとする様子が見られました。また作品の製作過程で、用いた材料の付箋を作品に移すことで、「とがった材料を多く使っているから、えんま様が住んでいそうな感じになっているね。」「ぼくの家を強そうな感じにするのに使えそうだ。」と、材料の感じとイメージとをつないで、よさや工夫するところを伝え合うことができました。

リフレクションでは

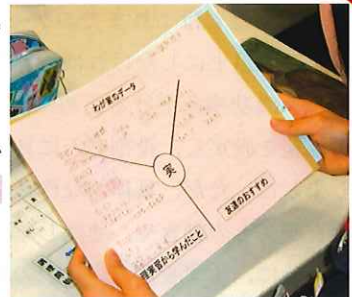
「材料の見方を共有化することで、材料からイメージを広げにくい子どもへの手だてとなった」「付箋に感じたことを書いてから話し合いをしているので、活発に意見交換をしている子どもの姿が見られた」という意見をいただきました。一方、「形や色、手ざわりを総合的に捉えたり、材料を組み合わせたときの感じを話し合わせたりすれば、もっと発想が広がったのではないか」というご意見もいただきました。

家庭科

第5学年「家族の心も体もぽっかぽか ―ご飯とみそ汁に思いをこめて―」

はが 芳我
さやか 清加

調理実習で基本のみそ汁を作り、みその濃さや実の種類・量などをわが家と比較した子どもたち。本時は、これまでの学習を生かして「家族が笑顔になるオリジナルみそ汁」を考えていきました。そのためには、だし、実、みそを何にするか（材料）、実の切り方や入れる順をどうするか等、工夫を具体的にしていく必要があります。そこで、わが家のみそ汁に関する情報や、これまでの学習等をまとめたYシートを振り返らせました。「わが家は煮干しでしっかりとだしをとって、みそを少なめにしている。」「実は、食べやすい大きさに切るとよかった。」



等、取り入れたい工夫を選択していきました。また、点火→沸騰→消火を時系列【Yシートから情報を選択する】で表にしたレシピ表に調理手順を書き加えていくことで、「しっかりと火を通すためには、固い物から入れるとよ



【レシピ表や実物を基に交流】

かった。にんじんや大根が先だ。」「香りを大切にしたいから、みそは消火間際に、ねぎは消火後に入れよう。」と材料を入れるタイミングを吟味することができました。

ペアでの交流では、互いの工夫点を紹介し合ったり、材料の切り方や入れる順を確かめ合ったりしました。「家族の健康を考えて、野菜たっぷりにしたよ。」「栄養バランスのよい実の組み合わせにしたよ。」とオリジナルみそ汁に込めた家族への思いをメッセージにし、自分の工夫を明確にすることができました。

リフレクションでは

「Yシートに情報が整理され、思考を助ける手だてとなっていた」「みそ汁の実を実物で提示したことで、一人分の分量や色どりなどがイメージでき、マイレシピの工夫が具体的に変わった」というご意見をいただきました。一方で、「『家族が笑顔になるみそ汁』とはどういうことかを、もっと明確にしたらよかった」「話し合いの視点を焦点化すると、アドバイスしやすかった」というご意見もいただきました。

体育科

第1学年「チャレンジ!ふさ小オリンピック -とびばこあそび-」

やまじ あきよ
山路 晃代

前時の学習では、跳び箱をいろいろな跳び越し方で楽しんだ子どもたちは、「次はもっと楽しく跳び越したい」という思いで本時を迎えました。

初めに、跳び箱を跳び越す四つのコースにチャレンジした子どもたちは、動きを少し変えるだけで、前よりも楽しい動きになったことに気付きました。そこで、「工夫して楽しく跳ぼう」という学習課題を設定し、楽しく跳び箱を跳び越す動き方を考えていきました。楽しい動きにするためには、跳び越す動きの中のどの部分を工夫することができるのか、見つけておく必要があります。そこで、どこで、どんな



【どこで工夫ができそうか確認】動きが工夫できそうかワークシートにある跳び箱の絵の上にペーパーサートを置き、自由に動かして見つけていきました。その際、見つけた動きを短いことばで表し、表でまとめました。しかし、跳び箱を跳び越す連続的な動きに対して、どのような体の動かし方をすれば目指す動きになるのか分からないため、一連の動きをいくつかの部分に分け、その部分の体の動かし方だけをタブレット



【部分の動きのみを見る】

を用いて視覚的に捉えられるようにしました。「遠く」に跳びたい子どもは、「ここで膝をぐっと曲げるといいんだな。」と気づき、目指す動きにつなげていきました。また、お互いの動きを見合う際に、「膝が曲がって遠くに跳べていたよ。」と動き方のよさを伝えながら、次にチャレンジしたい動きを選ぶことができました。

リフレクションでは

「ペーパーサートを用いて、動きを表現することで1年生でも自分の動きをメタ認知して、イメージすることができていた」「タブレットを使うことで必要な情報だけを子どもに提供することができていた」等のご意見をいただきました。さらに、タブレットだけで動きを捉えるのではなく、手本の動きを目の前で見せて部分の動き方のコツを見つけることができるのではないかという代案をいただきました。

体育科

第6学年「1・2・3でアタック! ~アタック・プレルボール~」

みやざき あきら
宮崎 彰

子どもたちはこれまでのゲーム分析の結果から、「試合に勝つためにはアタック成功率を70%以上にしなければいけない」ということに気付くことができました。そこでアタック成功率を上げるために、「チームに合った作戦を考え、ゲームに生かそう」と学習課題を設定し、役割ごとに具体的な作戦を考え、状況に応じて作戦を選択することにしました。ただ、具体的な作戦を考え、選択するには「レシーブ」「トス」「アタック」



の役割ごとの動きや、連携して攻撃することのよさを理解しておくことが必要です。そ【タブレットで動きの確認】のために、まず役割ごとにどのような動きがあったのか、タブレットで確認できるようにしました。さらに、確認した動きを板書上に位置づけ、互いに連携し合って攻撃することのよさを捉えることができました。



【分析結果を基に振り返り】

1回目のゲーム終了後、ゲーム分析を手がかりに連携の場面に焦点化して課題を追究していくことで、「成功率が低かったのはレシーブに課題があったのかも。2人でレシーブする作戦に変更しよう。」と、チームの課題を捉えた上で作戦を修正していくことができました。2回のゲームを終えて、「トス役の〇〇さんが、いいトスを上げてくれたので成功率も上がり、試合に勝つことができました。」「2人でレシーブする作戦に変更したら成功率が上がって得点できた。」と、役割を明確にした作戦を考え、状況に応じて修正することで成功率が上がり、得点につながることを捉えることができました。

リフレクションでは

「連携して攻撃するよさを捉えさせたことで、ゲームの中での作戦がうまくいったかどうか判断することができ、その後の修正にもつながっていた」というご意見をいただきました。一方で「役割が固定されていたことで選択できる作戦が限られてしまった」というご意見もありました。「すべての子どもたちがアタックできるようにルールを変更することで、より作戦の幅が広がるのではないか」という代案が出されました。

「予防接種をしても、マスクをつけてもインフルエンザにはかかってしまう」このような子どもたちの経験から、本時は、どうすればインフルエンザを防ぐことができるのかを考えました。

まず、インフルエンザが起こる原因を考えました。それには、病気には四つの要因があること、それらが関わり合っていることを捉えることが大切です。そこで、四つの要因をイラストにして表しました。捉えにくい病原体、体の抵抗力は、体とつない【原因をイラストで示す】



で提示し、同様に、要因どうしの関わりも血管やのどの繊毛の写真を用いて視覚的に提示しました。「一つの要因だけでなく、関わり合って起こる」ことを捉えた子どもたちは、予防法は一つではなく四つの要因から考える必要があることに気付きました。しかし、すぐに四つの要因を同時に使って考えることは困難です。そのため、考えやすい要因を選び、一人一人が予防法を考えられるようにしました。その後、同じ要因に目を付けた人と話し合い、自分の考えを確かめたり、友達の考えを学んだりしました。そして、学級全体で意見を出し合い、『生活のしかた』では睡眠をしっかりとする』『環境』では寒いときには重ね着をする」等、四つの要因から多くの予防法が見いだされました。



最後に身近な感染症の要因をまとめた表を示し、感染性胃腸炎等、病原体がもとにな【同じ立場で意見を出し合う】って起こる病気の予防法も、本時の学びを生かせばよいことに気付けるようにしました。

リフレクションでは 「教材の色分け等、目で見て分かる工夫がされていた」「写真の資料を提示することで科学的知識が深まり『思考力』につながった」というご意見をいただきました。一方、「もっと子どもたちの経験を表出させれば、自分の生活や行動のどこに課題や改善点があるのか考えが深まったのではないか」「子どもどうしが交流する時間をもっと確保する必要があった」等のご意見もいただきました。

鼎 談

テーマ「ユニバーサルデザインの授業づくりについて」

ユニバーサルデザインの授業で様々な取り組みをしつつ、課題に到達できない子どもに対しては、特別支援教育の視点を生かす必要があると考えます。子ども自身の実態を、学習面・行動面・対人関係等で分析するだけでなく、その子がつ背景まで、様々な専門家と連携をとりながら把握していくことが大切です。子ども一人一人の教育的ニーズをしっかりと把握し、そのもてる力を高めることが重要なのです。



【丹野 哲也 先生】

すべての子どもの学びを保障するために

生活機能と障害というのは、参加できない、活動できないということです。まずは、授業に参加できる、活動できることが大切なのだと思います。そのために、これまでは本人の力を高めることで参加させようとしてきましたが、それだけでは難しいです。支援によって引き出される力と周囲の理解によって引き出される力が必要だと思います。また、子どもたちのセルフエスティームを高めるためには、指導はきっちりと、評価は寛容にすることが重要だと考えます。【坂井 聡 先生】

本校では、教師が積極的に支援する面と、本人に委ねもてる力を高める面とを見極め、働きかけを行っています。例えば、第3学年の社会科「めぐって見えた学校の周り」では、探検をして得た、どこに何があるのかという知識に対して特別支援教育の考えを生かした働きかけを行います。知識等の、思考に必要な要素に働きかけることで、思考活動を保障し、子どもたちの「思考力」を高めようとしているのです。



【西岡 由都】

外国語活動の研究授業報告

第6学年「わたしたちの夢宣言 - What do you want to be? -」

しみず 清水 ありきと 顕人(HRT) きたやま 北山 けいた 啓太(JTE)

本校のALTであるジョン先生は、子どもたちの将来の夢を聞いて疑問に思ったことを、ビデオレターを通じて知らせてくれました。首をかしげて両手を広げるジョン先生の表情が、動画と共に写真で示されると、子どもたちはジョン先生が疑問をもっているようだと感じ取りました。その疑問に分かりやすく答えようという学習問題をつくり、ジョン先生が繰り返すことばを手がかりに、ジョン先生の疑問を推測していきました。そして、カナダと日本では人気のスポーツや職業に違いがあるために、ジョン先生は疑問をもっているのだ【ビデオレターから学習問題を設定】と気づきました。また、その職業を希望する理由を付け加えることで、より分かりやすく伝えられることにも気づきました。そこで“Because ~.”を使った言い方を練習する場をもつとともに、これまでの学年で慣れ親しんできた言い方が記されたコミュニケーションボードを手元に用意し、“I like ~.” “I can ~.”等の言い方やジェスチャーを生かしてアクティビティを進めていきました。



【コミュニケーションボードの活用】

リフレクションでは 「外国語活動においても、子どもたちが学習問題をつくることで目的意識をもって活動を進められると感じた」「コミュニケーションボードに既習内容を振り返ることができる工夫があり、交流の際に生かすことができている」というご意見をいただきました。一方、「コミュニケーションボードの話型があるために、かえって形式的な交流になってしまったのではないか」というご意見もいただきました。

外国語活動 年間指導計画

本年度は、「Hi, friends!」を基に新たな各学年の年間指導計画を作成し、学年間の系統性を重視した取り組みを行いました。

低学年…新しい語彙や表現に出会う

低・中・高学年ごとに重点内容を設定

各学年、各時間の活動内容を明記

中学年…語彙や表現に慣れ親しむ

高学年…言語や文化の違いに気付く

学年	単元	活動内容	目標	評価	備考
低学年	Unit 1	Lesson 1	自分や友達の名前を英語で呼ぶ。	自分の名前を英語で呼ぶことができる。	
		Lesson 2	自分の好きな食べ物を英語で言う。	自分の好きな食べ物を英語で言うことができる。	
		Lesson 3	自分の好きな動物を英語で言う。	自分の好きな動物を英語で言うことができる。	
中学年	Unit 2	Lesson 1	自分の好きなスポーツを英語で言う。	自分の好きなスポーツを英語で言うことができる。	
		Lesson 2	自分の好きな職業を英語で言う。	自分の好きな職業を英語で言うことができる。	
		Lesson 3	自分の好きな場所を英語で言う。	自分の好きな場所を英語で言うことができる。	
高学年	Unit 3	Lesson 1	自分の将来の夢を英語で言う。	自分の将来の夢を英語で言うことができる。	
		Lesson 2	自分の好きな国を英語で言う。	自分の好きな国を英語で言うことができる。	
		Lesson 3	自分の好きな季節を英語で言う。	自分の好きな季節を英語で言うことができる。	

低・中学年は、「Hi, friends!」とのつながりを明記

各活動ごとに用いる語彙や表現を明記

※ 年間指導計画の詳細については、本校ホームページ（附属坂出小）で検索をご覧ください。

附属坂出小

検索

分科会講演

国

水戸部 修治 先生 「単元を貫く言語活動の授業—その改善ポイント」

1 目的や必要感をもたせた国語科の学習を

国語科で言語活動を遂行していく際には、目的や必要感をもたせた指導が非常に重要になります。例えば、中学年における「要約する」という学習の場合を挙げると、単元を貫く言語活動を設定し、その目的や必要性を明確にすることによって、叙述の何を残し、何を省いていくのかという判断が可能になってきます。読んだ本の、自分が面白いと思ったところを説明するという目的をもった要約では、それを伝えるために必要なことばや文が選ばれているかという判断がなされていきます。また、調べて分かったことから30秒のCM原稿をつくるという目的をもった要約では、どこをどのように縮めるのかということが明確になってきます。

2 単元を貫く言語活動を位置づけた指導過程の多様な構想例

単元を貫く言語活動を位置づけた際、子どもたちは、第1次で言語活動全体の見通しをもち、学んだことを第3次の自分の表現に適応させていきます。ところが、第2次での教科書教材を扱う学習が、第1次、第3次での活動とつながらないという課題が見られます。それらの課題解決のために、いくつかの指導過程が構想できます。単位時間のうち例えば30分で教材文を読み、15分で自分の選んだ文章を読む「入れ子構造モデル」。教材文を読む学習と自分の選んだ文章を読む学習を1時間ずつのセットにしていく「ABワンセット方式」。「書くこと」の指導で、教科書教材で書き方のポイントを見つけ、それを自分の文章に生かしていく際、学習が進むにつれて、自分の文章にあてる時間の比率を大きくしていく「サンドイッチ構造」等、様々な指導過程が考えられます。



社

澤井 陽介 先生 「小学校社会科授業の課題と解決のための具体策」

1 問題解決学習について

子どもたちがつくる学習問題は、何を調べるかという見通しをもってつくりたいといけません。子どもたちが、問いをもつ、予想をもつ、見通しをもって独り歩きをする。事実をしっかりとつかんで、「なぜ～なのだろうか」「どのように～しているのか」などの問いに、学習したこと（具体的な事実）を使って「～だから」「つまり～」と答える。この道筋を大切に、授業をしてほしいです。

2 思考力・判断力・表現力について

思考力とは、さまざまな情報を、比較、関連付け、総合して社会的事象の意味を考える力です。

判断力とは、自分の考えをもつ過程で使われるもので、価値判断・意思決定などとも言われます。ただし、いきなり子どもに求めても難しく、思考して理解して初めて適切に使われるものであるとも言えます。

表現力では、出力ツールばかりが注目されますが、調べた結果、そこから情報整理して理解したことを、子どもがもっている言葉や自分で描いた文脈に置き換える過程を大切に育てていくべき力です。

3 これからの授業づくりについて

社会的事象との出会い、気付きや疑問を大切に学習問題の設定、学習問題に即した話し合いや学習のまとめ、予想の表出と教師の追加情報の提示による内容の焦点化、予想の検証など、45分間の問題解決を大切に授業づくりを改めて見直しましょう。子どもたちは、問題解決の中で見通しをもったり、学んだことを振り返ることにより、社会的な見方や考え方を成長させていくのです。



理

村山 哲哉 先生 「理科における問題解決と授業づくり」

1 定型の問題解決から非定型の問題解決へ

理科における問題解決で大事なものは問題点を見いだす、問題をつくるということです。日本はすでに与えられている問題を戦略的かつ方略的に解いていく定型の問題解決は優れています。しかし、問題を見だし、見いだした問題を解決していく非定型の問題解決について日本は、他の国と比べて弱い傾向があります。自分で考えずに、問題を与えられたら解ける。答えがあるものは得意だけれども、答えがないものは不得意であると言えます。このことは理科の目標にもあり、ここに着目して取り組んでいく必要があります。

2 子どもが主体的に問題解決に取り組める授業づくりを目指して

問題解決に向かう原動力とは欲求です。問題解決の主体は当然子どもです。したがって教師は子どもが主体となって問題解決に取り組める授業にするためにいくつかの大切にしなければいけないポイントがあります。

一つは、子どもが「分りたい、知りたい、こうしたい」という意欲を刺激する場を用意することです。用意することで子どもたちは、自分の問題として主体的に取り組むようになるのです。もう一つは、自然事象への働きかけです。子どもたちは体験活動を通して、言語を生み、もっている知識とつないだり、広げたりして考えをつくらせていくのです。いくら実験結果を得ても、そこにたどり着く途中がしっかりしていないと、生きて働く知識とはならないのです。身につけた知識を基に世の中のものをもう一度見ていくことを大切に授業づくりに取り組んでもらいたいと思っています。



特

丹野 哲也 先生 「インクルーシブ教育システム構築の中での授業づくりを考える」

1 インクルーシブ教育システム構築に向けて

インクルーシブ教育システム構築の中で特別支援教育の推進は欠かせないものであって、さらに充実・発展させていかなければならないと言われています。また、今年一月に国連事務局に寄託された「障害者の権利に関する条約」の中に、個人に必要なとされている合理的配慮が提供されることが示されています。

インクルーシブ教育システム構築においては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、教育的ニーズのある子どもたちに対して自立と社会参加を見据えて最も確に答える指導を行える「多様な学び場」の連続性を用意しておくことが必要です。それぞれの学びの場においても、Aさんのため必要な合理的配慮、Bさんにとって必要な合理的配慮、一人一人個別に異なる合理的配慮が求められてきます。

2 特別支援教育の視点を生かした授業づくり

特別支援教育の視点を生かした授業づくりとは、教育活動を構造的に見て、どのような支援が必要なのか分析していくことから始まります。A君にとってはなくてはならない支援が、全体に良い影響を与える支援になっていることがユニバーサルデザインなのです。しかし、そのような支援以上にさらに個別の支援が必要な子たちがいた場合には、その子にとって必要な変更・調整を行いながら、つまり合理的配慮を行いながら、ユニバーサルデザインを核として考えていく授業づくりが重要であると思います。



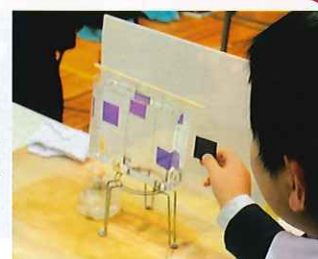
全体授業報告

理科

第4学年 「発見！もののあたたまり方 —熱伝導と対流—」

もり まさずみ
森 真佐純

前時ほとんどの子どもたちは、水の温まり方を「水も金属と同じように熱源から順々に温まる」「熱源に近い底から温まる」と予想していました。本時はその考えを確かめるための測定場所を確認し、一度に測りにくい温度変化をデジタル温度計とサーモシートの色の変化で調べました。子どもたちは、絶えず変化していく水温を記録シートに色シールを貼って記録していきました。また、温度変化の様子を繰り返し確認できるように、タブレットを使って撮影しました。すると、ビーカーの上部に置いたサーモシートの色が、底部や中間部に置いたサーモシートよりも先に変化しました。黒板に掲示された他の班の結果は、どの班も上部の温度が高くなっ



【温度変化をシートの色で確認】



【動画をなぞりながら考えを発表】

ていました。そこで子どもたちは「予想と違って、水は、底を熱しても上から温まっていくようだ」と水の温まり方を理解していきました。さらに「底を温めたのに、どうして先に上が温まるのだろう」と疑問に感じ、撮影動画を見直し始めました。そして、熱源から上がっていたももやした水の動きから「上が先に温まったのは、温められた水が上へ移動しているからだろう」と考えました。その後、サーモシートの色を使って、温められた水が上部へ移動している様子を確認した子どもたちは、「やっぱり温められた水が上に動いている」と納得しました。この結果を基にした全体での意見交流では、動いた水の様子を動画上でなぞりながら「水は、金属と違って温められた水が上部に移動して、上から全体が温まっていくようだ」と自分の考えを発表し、金属と違う温まり方をする、水の性質についての見方を深めていきました。

シンポジウム

研究会の最後を締めくくったシンポジウムでは、『思考力』育成と学び合い「全体授業」について話し合いが進められました。シンポジウムの要点をまとめてみました。

学び合いのポイントについて

国語科の学び合いで、大きく四点ポイントを挙げると、話し合う目的、方向性、自分の考え、対話があります。方向性には、一つに絞り込んでいくというものもあれば、発想を広げていくというものもあります。また、自分の考えをもったうえで、どんなことばで対話を行うかがポイントです。



【水戸部先生】

問題解決を通して

理科の問題解決では、予想と結果を比べる縦のラインと、各実験結果を横に並べて傾向性を見る横のラインが大切です。横のラインにおいて、グループ協議の場を意図的に設け、ディスカッションさせることが、思考力やグローバル化する社会で求められる力の育成につながります。



【村山先生】

交流を通して

交流では、事実をもっと丁寧に読み取って、それを具体的に表現することが大切です。同じような答えであっても、違う子どもに自分の文脈で話をさせるとちよっとした違いとかげれが生まれ、そこから理解が促され、思考力の育成につながっていくのだと思います。



【澤井先生】

思考力の育成

必要となる働きかけとは

教材が子どもたちに分かりやすく提示されたり、ICT機器を使って対象の変化を再確認できたりするように授業が構造的に組み立てられていなければいけません。加えて、意識化、動作化させることで知識を定着させるような働きかけが思考力育成につながっていきます。



【丹野先生】

思考力を育成する上で大切にすべき点を、具体例を挙げながら説明していただきました。さらに、本校の今後の研究の方向性について貴重なご意見をいただきました。4名の先生方、ありがとうございました。

次年度研究に向けて

本年度の研究発表会でいただいたご意見



○思考力を育成するという研究テーマが、今の時代に合っていた。自校の研究の参考になった。

○すべての子どもが、授業の土台にのるための、さまざまな支援がなされていた。



【授業リフレクション】



【シンポジウム】

○学び合いにおける対話等の言語活動を、いかに組織しているのかが、より明らかになるとよい。

○協同的な学び、学級経営を根拠にした思考力の育成が、今後求められてくる。



次年度研究の方向性

★「思考力」を育成する，対話のある授業を目指す。

★一人一人の考えを，学級集団の中でどのように関わらせ，高めていくかに，より焦点を当てて授業づくりを行う。

あ と が き

教 頭 やぶうち まさあき
藪内 雅昭

本年度は2年次研究として、思考に必要な要素への有効な働きかけと学び合いを活性化させる働きかけについて、特別支援教育の考えを生かしながら追究してまいりました。県内外の関係諸機関から多くの方にご参会いただき、さまざまな立場から貴重なご意見をいただいたこと、職員一同喜んでおります。

次年度は校舎の一部耐震工事と体育館の工事が行われるため、これまでと同規模の研究発表会を開催することができません。現在のところ各教科がいくつかのグループに分かれて、日をずらしながら授業と討議を中心とした会を実施する予定です。詳細については決まり次第、本校のホームページでお知らせしますので、ご覧いただければ幸いです。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

編 集 委 員

中 田 祐 二
西 岡 由 都 森 真 佐 純
清 水 顕 人 白 川 章 弘
藤 本 博 文 中 家 啓 吾

平成26年3月18日

香川大学教育学部附属坂出小学校
TEL 0877-46-2692 FAX 0877-46-5218
E-mail sakaide@ed.kagawa-u.ac.jp
URL http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~sakasho/